



暫遊漫撚

全

和
623



門 001
號 623
卷



上海圖書館藏

暫遊慢然

雖	隘	潮	海	而	長	濃	在	客
堤	之	驕	西	來	良	天	周	遊
未	海	浪	諸	牧	自	下	易	豈
潰	口	怒	郡	田	郡	水	訟	老
諸	如	昔	受	諸	上	國	之	人
郡	哇	之	之	流	揖	也	明	之
之	夫	走	注	同	斐	飛	夷	所
水	善	海	之	伊	自	信	也	宜
淵	坊	也	南	吹	德	大	冒	為
滯	水	其	海	溪	山	川	進	非
滯	滯	行	其	水	各	合	不	取
著	况	近	受	來	叢	流	己	宜
澁	諸	故	也	自	源	五	終	而
而	新	易	也	西	北	六	必	為
不	田	入	蘇	安	方	百	入	之
利	乎	今	范	八	亦	里	淵	且
桑	故	也	無	多	三	來	而	赴
田	每	諸	涯	藝	四	自	己	水
變	久	新	其	厚	百	東	矣	國
澤	兩	田	注	見	里	北	西	此

滴

麻疇成池。前日陸行。今忽以舟。故天下水患。唯西濃
 為甚。余自入濃。月餘不仰大陽。因自恨。歎棄戶。雖飢
 尚得在家。余則遠客異鄉。殆乎漂々。為挑梗流。豈不
 益傷乎。一日為濃人講水利。曰：水就下者也。而我田
 其下而高之。好廣者也。而我束而隘之。譬之人身。腸
 胃受水。日幾斗升。其漉亦日幾斗升。溢而不疏。則病
 閉而不通。則死。故曰：勿為利下海。籌勿便己曲防。勿
 與小人謀。以人害天。勿與水爭尺寸地。勿恃水之不
 來。曠濶彼所來之地。浚李滋。開其支。封山以待之。濃

曰：白圭輩每以奇策干濃人。今先生

人曰：善。濃人常飽於奇策。今先生所言。平々。老生之
 常談。老生之常談。乃先哲之大法。如使此言行。則濃
 人必免昏墊之患。濃人免於昏墊。則國家無西顧
 之憂。諸侯無助役之勞。西濃沃土。年收數百萬石。豈
 不大興利乎。使河堤使者聞之。何如。曰：使者愛財。欲
 自肥者也。欲速成者也。何足與議。曰：部刺史治之。何
 如。曰：任滿則去。未有慮及遠者。又其吏受直盜噐乎。
 曰：本土諸侯董之。何如。曰：汝未聞。今春福東。閘壞。水
 溢。一鄉成池乎。其罪在邑長。與閘工。邑長閘工。本土

人也。然則如之何。則可。曰：余嘗濃人思之久矣。無已。則本土諸侯乎。濃人而免於水害。雖余老人。年三涉大川。所不辭焉。

暫遊慢拙

昔吾家佚嘗哭老聃出。當時從者疑之。後人亦議之曰：聃列仙祖也。豈有之乎。八九年。前湖東大園松翁夢遇一道士於松間。坐石上。贈詩且曰：維我二人。時會於此。道士沈吟。和未成。翁夢忽覺。急起圖之。更使善畫人寫之。明眼鏡上人見之曰：咄。豈我秦老像也。翁未與老相識。歎其季子寬見余。亦歸告父曰：酷肖。於是翁自曾根二百餘里。携夢詩。訪草廬。望余曰：信我夢中人也。但身短於夢中人。二三寸。余曰：翁豈

恨道士無和詩乎。吾命終之其末句曰。今日留
君勸一杯。盤中唯有仙人骨。又曰。與君共歷三
千歲。始道兩人身。是仙。於是余始佩夢仙印矣。
居無幾。翁逝。余哭之曰。噫。仙友而如此乎。况於
世友乎。又况於我蒲柳質乎。世豈有神仙哉。繼
使有之。余唯欲百年與人健在而已矣。故翁倦
然不成者也。今茲夏。阻雨而濃。三十餘日。會
晴。跨青牛。出宿不破。閔尹家。鷄鳴下閔。訪翁。奮
廬。主人子禮。克家之子也。以余為仙。且以為先
人之舊。會諸詞友。燕樂嘉賓之心。舟遊湖中。君

山攀丹梯。蔭青松下。愴然有所感。曰。此山仙鄉
也。子禮。仙種也。諸子亦皆詩酒仙才也。柳翁之
昔夢。豈為其子耶。密因攀杯曰。聃之子名宗。孫
名假。此輩之於秦佚。通家子姪也。而未聞佚携
之以遊湖山仙境。又未聞此輩能為鶉詠。然則
今日之會。古人所無也。先生其記之。遊草末可
矣。

之會。先生家
中所無也

暫遊慢撫

琵琶洲遇雨

百尺長橋獨欲過
嘈切琵琶河風鳴
水咽兩山

雨客子青衫奈濕何
琵琶字唐人多為入聲

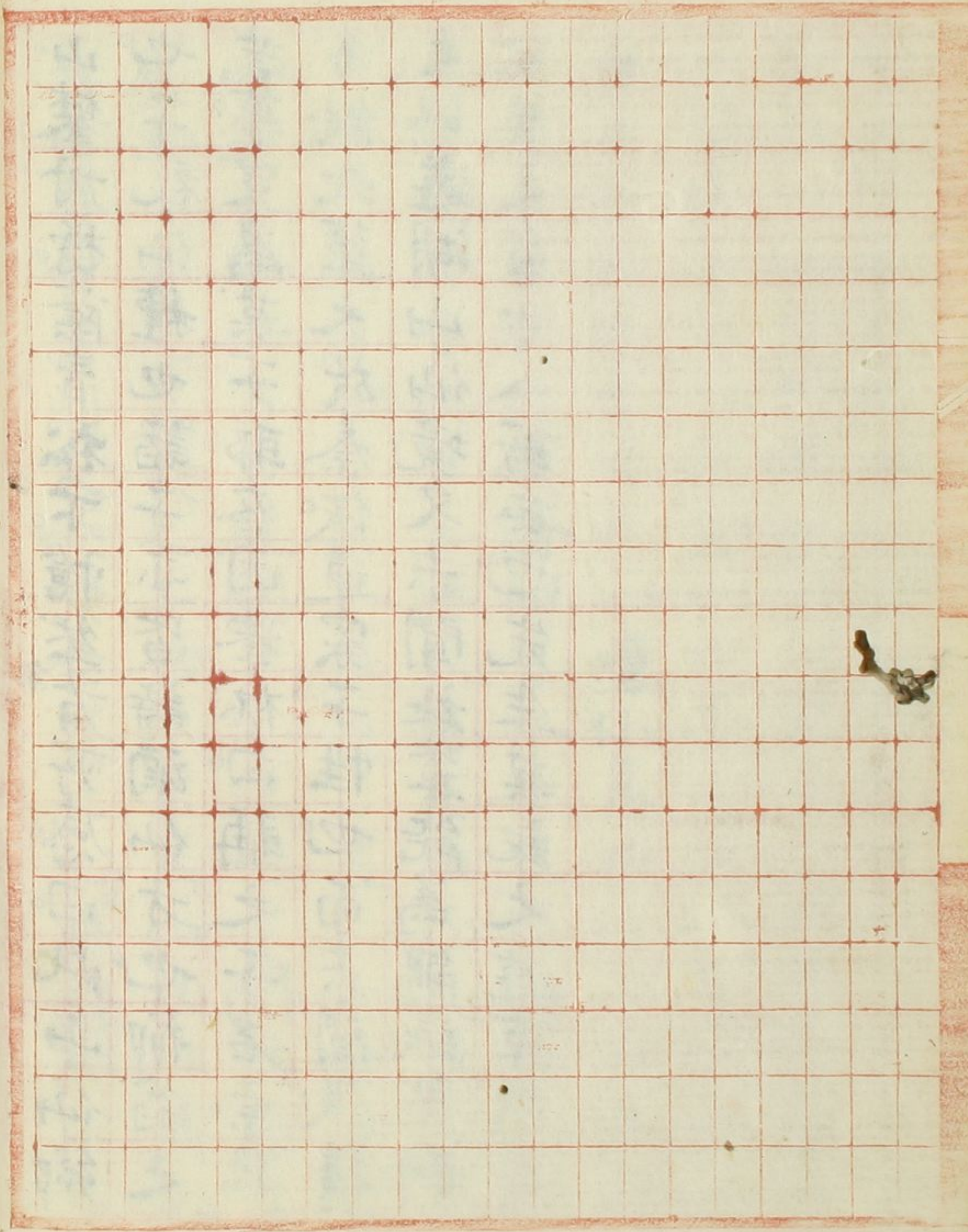
琵琶洲夕水聲緩曲
駛彈瓜雨鳴老大
耻為高客

婦四絃絕在一心貞

怨復怨兮江水頭
琵琶白菊幾回秋
幽哀不得絃中

訴山兩河風向客愁
白菊琵琶傳為寶器然未聞

心の依のそくおひけて白菊の琵琶の怨をきくは



勢小倭郷西庄
皆有秦目村
一作甚

るに水露ふりて名きくの怨を素世をふ人

甚自寺後亭小憇山名 鳳凰

好遊秦老求詩料秦女峰頭過古廟但恨笈中無鳳

笙松風樹下空長嘯南勢有甚目村一作

古寺門高秦女峰樓懸建武二年鐘行人欲問南朝

事遺響寂寥雲霧封

雨たふりふりかき水も

山吹の花ちりもていさめふ木田村の暮ひらにわく人のあき

木田村の大結る門の許とひひて

ささ水のるふあまつ木田の里れを引水も恨をたす

根高村

茅枕旅のやりのゆるの雨小ねさの雲のあふきあもし

水うをぬりあにやうと

五月雨ふ池のあをんをゆきと何れもて能えぬわつし

杜鵑泣くりりうえ枝もとらししの急ふまふりとれ

あやしたるしとくもがらん鳴るふきとあひ一聲

あのみ花あふぬ梅一色の緑少澄りり五日雨のる

河海のほろしきも水も

夏科や焼梅の月も清くしては流の苔もけしき

子秋、鱒魚あつりきん

旅の宿もあつりきんも長夜もよき物もあつりきん

霜のやまもあつりきんも冬もあつりきん

冬もあつりきんも春のそとあつりきん

。海島神祠祈晴

十月毎尔一雨ふるまじいふくの聖のたきし神もあつりきん

雨中闘茶

銷長夏處緑陰風仙掌月圍論欲公因闘新茶還品

水草逢梅雨貯瓶中

花の香のためりゆくふ武士の宇治の本芽もあつりきん

題詠 氷室之
人宅作

養習鷹兒

く、鷹の利もあつりきんも遠里の了急中の雲雀もあつりきん

江の松あつりきん

洋田の塘江の松もあつりきんも橋の朽ぬもあつりきん

卯の糸の上もあつりきん

は田もあつりきんも卯の糸の紐もあつりきん

鶴海ふ立てり

揚田をうらち免浦田鶴の海ふ立てり、潮のきこ満ちる

瓢子花

夕つふの夕のひうい日もふぬとゆいそ海ふきり

冥海鶏

山陰のふ彼の冥海鶏の極ひさしあけり軒ふ鶏うふきり

地夕毛

下野や如源地乃石の藤の上を矢の下ふりぬ夕毛の地

萱報春

雪とのりゆりを梅う枝ふこそあふと雪のかく

澗表水

古知凡ふりけし見のまえぬとまき海ほやこふらん

邱梅

みりなきの雲のくさぐさ梅あ世のふかりきふきん

新梅風

年光し人住まの庵あもわう梅のゆも涼しきり

鴨川

もし火の影も流し移る舟艇なきも潮くさきり

夕樵歌

世の聲のたのよや 輕き夕音ふらふあふをの

関中燈

山寺の鐘もさそえぬ 暮の庵もたれむいねの燈の影

子規 以上題詠

子規の啼くもさそえぬ 暮の庵もたれむいねの燈の影

○將發津島作

雨あはれて京甲斐川 舟りかへしつらみのあはれいねの影

佐倉溪

溪をそりしあはれいねの影 舟りかへしつらみのあはれいねの影

毎渡ふふあはれいねの影 舟りかへしつらみのあはれいねの影

市江

舟りかへしつらみのあはれいねの影 舟りかへしつらみのあはれいねの影

下蘇川抵架名舟中作

欲下大川 霖乃晴漫 渺々 向南行 河伯望 羊吾擊

掌蒼溟 中起九華城

過蘇名懸壺樓主人

蘇川分作數條流 兩岸舟過幾十洲 望山幸不風吹

去醉上懸壺仙子樓

をりの崎

片糸の遠津の崎かきひらけし松今しつるをみおかしを

をりの崎松めしつ枝尔太刀をけて露ももる氣おこる

自勢入濃途中作

麻時變壠水滴天澤國江村信可憐始識人民作魚

鼈元縁滄海變新田

登多度山

八壺ハ河カ十漸シわの岐のみむらやとをたるん

宿多度山白雪樓

多る山をたしり多るまをる白雪のまゆの止るまゆ楼

樓主遊桑海朋發未帰

水郷落日江村雨似訪西湖楊柳浦鶴亦相隨飛海

南無人去報山樓主

多度の天沛神の廣刺かぬつきて

武士の名のやうある双刀細流の沛神をまひらうの神

多度神祠祈晴

伊留人を傳りしりり山徳山を葉さそ行きて傳言り

過駒野寄日比野老人

君の住る所の里のつとむるおん人の日を日に暮るは

登養老千歲樓壁上有昔年同高田諸子遊詩

愴然成咏韻用舊

有鳥々々千歲樓翔來翔去幾春秋仙餐菊水香無

恙瀑布白龍飛未休昔憶囊雲歸作憤今將隱霧此

長留登山報道天台女前度劉郎益醉遊

養老瀑布

泉懸天外水煙寒白道中開墨翠巖大于平日十餘

尺瀑布無如霖後者

天かきやた七夕の天の川流まじりる流の白糸

十歲樓奉懷觀海千賀君

養老山高千尺深青巖酒湧菊花泉花泉撲鼻香芬

覆猶似君家前夜筵前夜筵三日酒醒身已在養老山

同前奉寄聖居高木君

養老二奇千古開歎稱君亦復奇才前日長鯨圖

尾使人能騎上仙臺

發	之	則	小	鳥	飛	出	翔	翻	堂	中	滿	坐	擊	節					
嚶	嚶	鳴	集	古	園	林	紫	燕	黃	鸛	都	好	音	更	有	仙	人	元	元
放	放	杯	亦	又	似	飛	禽												
宴	雖	歷	千	秋	不	可	忘												
淫	霖	十	日	日	殊	長	此	日	棄	晴	登	快	涼	開	襟	叫	快	高	亭
將	叢	高	田	登	多	羅	山	勝	肥	主	人	手	製	瓢	杯	見	贈		
腰	間	取	佩	似	瑤	瓊	山	路	風	吹	浙	瀝	聲	應	使	牧	牛	巢	父
葦	流	涎	我	向	醉	鄉	行												

渡	一	瀨	川	踞	石	上	飲	柏	雷	仲	所	贈	菊	川	客	身	乃		
蘇																			
自	高	田	至	此	不	遇	一	山	樞	波	浪	高	憑	怒	客	魂	驚	欲	銷
幸	能	登	斯	岸	坐	得	飲	孤	歌	誰	料	寒	窮	谷	醉	鄉	通	一	條
多	羅	山	中	懷	蕉	兩	主	人	兼	雨	亭	石							
君	家	三	日	飲	甚	似	歷	旬	霖	水	後	津	迷	客	山	中	酒	如	金
地	不	非	幽	洞	鳥	終	無	好	音	因	思	蕉	雨	夕	題	句	遍	亭	林
多	羅	客	舍	憶	前	日	同	壽	山	井	翁	及	諸	子	宴	快	涼		
亭	賦	寄	主	人															

五

かろく

大八海をまわち小錦して母を何れと夢漁とふあそ
 其中小位漁の川も飛洋川も越の境の山も由流しあつと
 此来てくぬち海ふれあ流のうらよるこそあ他とえぬ人
 ずいしむぶきものんすえんを物さく小すきといひあひさ
 度山ふへくる葉の酒あひさくのおちるお城ふくを葉を
 延ふとさくく小赤と葉山を葉しりより五月雨の雨
 ふくあて九月十日晴るあく流の糸糸いりりく後葉の
 春い大空をふくとちりりる井の岩もうらさく山麓

わと等もいふ 宿かかん方れあち小と五細あつても本は信
 ちれとあしりりりあ病も五下しうち三りり肌もさえてあ
 ちの衣や岩祢もふ昔をやあんとぬえとあうんあま
 すかるをりりもれ氷室の君のみりりり裕のまあを
 あひりりり一重と重のあしりりりあんや

反歌

行末をばあいの夜に帯あひりりり立て神尔初りしあひりりり
 夕霧あ舎窓破風透狐吹火狼吼雨數夜不能
 睡寄懐故人長歌一首并短歌

足引の山の山物くみかてあつれあやめあつれあやめ
 夕アおえりくみかてあつれあやめあつれあやめ
 の枚の指おぬえと音鳴んあやめあつれあやめ
 より鬼ひくくあはあつれあやめあつれあやめ
 わくまとすくもあつれあやめあつれあやめ
 ろくまあつれあやめあつれあやめあつれあやめ
 少しつあつれあやめあつれあやめあつれあやめ
 断てあつれあやめあつれあやめあつれあやめ
 方々えやあつれあやめあつれあやめあつれあやめ

此の行を居るまゝに
 五歌

明ぬえりくみかてあつれあやめあつれあやめ

多羅客舎奉謝ハ勝高木君見訪

是然空谷響況引紫騮駒行酒人難備釣魚竿亦無

憐農歎久雨憐齋顔迂儒幸仰干旌影以何告彼姝

冠山高木老公墓下作

重尋舊遺館宿草弔前春見客談經義杜門謝雜賓

三家如鼎足累世鎮関津附托今堪頼在天可慰神

八味亭の答りていふとる長歌

越の海ふすむるの名の響の所を二やとてまをて去垣の山うち
わをいふく鳴れりそわをくしらの夕日かや山輝ふら
をいしと飛鳥の音木の葉の橋よ然るそ是也そを舟中を
拙の秋葉小かくさそわく河河のちをせ海とも愛めよ
ゆるやうゆる事か山をよゆえりや一やのをす
お夕ふそをてたれ梅を右とて津を何とせん
そを海の物心の物をそをそを物いひて大和の
こし人の歌らそをそをいひつけつ梅いふん甚言感ふ

のりま

六月十二日喜晴寄柏純甫

誤入西濃大水郷月餘淫霖客心傷農家怨咨不忍
耳猶如腫痛難復陽已報堤潰歸無路又聞欲渡河
無染世間今無丈夫氣積陰濛一掩陽剛誰能揮劍
斬雲霧我欲授之以干將忽有文士弄彩筆感動天
地祈晴章今朝見山如見君君乃昨日祈晴人
六月十三日快晴贈水室獸人
五月了抄るそを小の六月の山こりう其月の十日迄

をやくかく隆をえし かのう わそふれを其のをふく
わすまふてりく 晴あん何一垣の向をさし里し舟あて
道ひわく七夕 秋^星ゆらるる天の堰^井や岩^井也
久方の照りて天の山をふやむわらしきし 小月影をね
しるく垣をく 糸の卯辰の望 此後晴くすあくる
その魚やあふんとおまきし 小川のひわくあ 山澤ふり
の計のあつむい 小いのちや生し ね道より帰るやまの
うましあふの比日しりつ のりそ 昭の何とそいあふん
りやあふんと舞あせえききし 健急の大津津の津急の

目を其計の沙塵のふ色の 魚を糸しきぬとらより帰
まわしと天う下あすむく せりあしき 幣^幣あり之輪を
しあふんふんそ大津津し 糸引よふん 其計の社^社のえ此
池の水をのりししたたけ あふん

関原

関原のふ尔原多う水と久方の言天う原し言う原あふ
六月十宮ふ破^破美ちうやう 福^福えとそあふり
あ破の美^美やあふあき 子規あふやあふん 月やあふあふん
日くは 小橋あふあふ 小橋原はあ破の美^美やあふあふん

夕雨を帯びて人の涙とわりの心さす
人すもぬ多彼の心さす小帯わりの
宿不破関尹家賞月

出関我亦欲西遊更被晴山夕景留
借問當年駐牛

日著書於此月前不
投宿山間尹喜家月前攀柳影西斜
可惜重関門廢

久不留夜半望舒車
伊吹山下立馬

吹嶺信為群嶺傑靈花仙草言難說
獨恨今來六月

齊不止望舒

望不着頂上十重雲

登坂門嶺望西一碧天波猶開鏡
乃是湖中村
子安敬甫兄弟在此走筆寄之

山頭登尽大湖開下視君家白玉臺
一點君山水煙

裡水仙似待酒仙來

題村氏妙南園呈子安兄弟
亭名濯纓

琴湖之東姊南園中有珍池遊鱗
翻清泉常自石間

湧冷澗澗滌襟煩老巖古松經幾
歲垂蘿如絲魚

欲吞山容峰態生雲謁奇草更華
四時繁如說此是

琵琶湖子必無兄弟肩相比君家兄弟平輿才日日洗
硯且洗杯吾亦今日濯塵纓池風亭上客襟開
近江のや湖の子とけ也と之とん池をの松し子もる

題伊藤老人芙蓉園

卿稱國友集嘉賓更有靈芝伴老人三秀年々吾亦
到隨君園際醉千春

姉川の乳す久と伊藤翁のいふを承て讀む

神風のい吹の跡の沍いのあみるまうてあめ子、姉の大
河をえる月あまを海くそ流る其川を世々の人々わ健

い花へく昔の軍よりまけて秋やあらしをさむ強田の大臣ハ
厚神の越の毛ある御念をうら減たんと美子あ
いりりと堀の山の井の汲井あこい軍しと戦せんを
えうをあせと汲井え汲あぬちきうをわのひ草の根の
引あふつ、小谷さう、小水あひいて越人あさ方をせし
武士の道の道ある樽弓引しわへぬつをよのをわがし
しと鳴弭の音きこゆ小さうちあへり小田の大臣し東遠き
源の居りちつきて川をわすと矢ををあらすけひの川
かあるあのもあの下く御念の御念をわしとあけりきし

昔わたりをきくくも
つゆ吹の山の松竹も
多るをいさぐす
の流のあふ海流ん

短歌

姉川をさふりわたり
ぬあまのいしふ
遠流を望むるは
ん

六月十六夜同塚士
栗長濱湖上汎舟賞月

解纜湖上浮輕舟
天地共我無不浮
藹々君山如遊

魚魚龍象晴皆出遊
清風明月無沈者
明月清風不

人求吾生從來任浮沈
取予趨捨不用心
唯愛湖山

共風月常誦太白江上吟
觸目勝景何必八
四美二

難具于今沈沈
碧波風上有月
宮下龍宮嗚呼

此生信如鳥長遊
湖山凡月中

あまのや鏡の心を
うらよる世照さる
雲井の世々

の風流士も海舟を
うらよる月を
あてて舟をほそ
れい

あふねのあまの
の心をあてれ
つ極一人も
業は

麓の山をさる
あんなにね
い物もさる
月の輝を尋

流んとこさる
いふれし
いさる
あまのあまの

狐尔若念の
鳴きこさる
いさる
あまの井の
跡に

宿の芳の
梅おとさる
いさる
唐紙の
松竹
吹ん甲斐の
海舟

貝や拾ふ人貝ありて珠やひろむ人しよる垣岸の山小土
のをらすしやうも古事をとほや妹をもちぬもぬ
中ぬきる人も我舟をせし井小あり丸路の浦山しや
おのふ人鏡の山は乳をうつしをあるふそあふもあ

反歌

えさ丸あき海とかいひは晴夜月舟通ふか人海と
湖の系をよふ立て鏡山をえやりてよ丸る

何次山を鏡ふかて来れあそ又鏡山ぬれきりうし

十八日同天山子礼翠巖柳川諸子遊天女

洲途中作

吾昔生後天女胎生來未試上仙臺莫道今無舟可

渡大湖遙擲手中杯

舟中東字韻

此湖昔鑿自天工其土積之東海東已得漱泛淩碧

浪富山亦御大鵬風

登湖中天女洲

天女降兮著袞洲雲為錦帶日夜流珠宮貝闕鰲背

起琪樹璀璨不知秋聞昔帝恐其流去繫以大巖渡

以舟吾謂解之放水
上東西南北自由浮
自由之山棄之去古
今舟遊無典侍帝不
聽兮可奈何舉杯聊
和天女歌且和且飲
時回望四山沉々浮
碧波彼其視我亦應
然此時乃知醉仙裏
湖面如鏡翻其背欲
款天下第一山唐古鏡背款天下
一者多有之
處めらう、まのの教を
けりまの女神の山を
み海の志
中いひて八重敷棚に
わたり給ふし
其海原のあ西尔く
きり山を久方の天津
をよめし舞
板山あをよめりま
の神をよめし舞

不元しけいふにあ
れ給てり其山くよ
ちやのりん
登るあを死ぬ茶を
るんまのとまりと
は名風小ね
う津波かきれんは
まのきふまを解ふ
ふゆひやの
をりしにきりて登
りまぬまの道に子
孫の君に
うの浦浪を舟こま
りし風のきり帆を
をりし津
くあをよめし女神
の山をよめしわす
のまの
のちわあをよめし
うひつゆひの色の
はれまの
にわ
まのあをよめしつ
つらまの女神の山
くまの
解
登るまのあをよめ
し世人をよめし
あつ
のまの

しそいーつらりまの如神のふふ酒を飲とは

反歌

妹^{あな}の神の清い水は海の後の中をひきよめり
久茶^{くぢ}清き神ん唐衣袖も跡もあらん

雲岫閣早起憶昨游

子礼書堂名

縹緲仙姬湖上山下山猶惹彩雲還如使此雲長在

袖千秋萬歲不衰顏

磨鍼嶺

勝地無如湖上景望湖唯是此高亭詩留韓使筆疏

客兒視君山此洞庭一點青螺天女降四絃妙曲我

曹聽水開鏡面心如照只照詞人真性靈

望湖堂和韓人南秋月^北鞏韻

韓客依欄復倚楹仰思東海世清乎况乎對此湖

山景應恨身無此際生

附韓人詩^〇峰頂誰開縹緲楹澹煙斜照一樓

平法時兩坐今晴望領取全湖夢態生南秋月

蹊^〇雨餘山翠濕孤楹四百^〇生^〇成^〇龍洲^〇收^〇得^〇澄

東岸短楹坐高^〇繚^〇看^〇七^〇平^〇却^〇嫌^〇海^〇外^〇無^〇相^〇配

湖光棧影際天^〇平^〇洞^〇庭^〇欲^〇共^〇同^〇題^〇品^〇一^〇點^〇君^〇山^〇

是竹生小華行人濟谷^〇朱簾高捲画^〇中^〇楹^〇晴

省改作暇

物目看

日湖光望裡平縱道夕陽無限好水村其奈暮煙生	迴溪散人口嶺上超然屋數楹竹欄斜壓樹梢平	時翠麥晴光動百里澄	湖夕照生	柏純甫自高田六七十里見邀于醒井驛	昨日琵琶湖撥一聲餘音在耳路難行吾本門前零落	客還教司馬遠來迎	宿柏原驛呈純甫	老身為遠客三旬尚未回登山杖欲折渡橋凡不開	熱行固已苦陰雨豈不哀偶一下阪路瞿然驚且猜	故人何能至是不夢見我云吾久在此待君遠歸來
----------------------	---------------------	-----------	------	------------------	-----------------------	----------	---------	----------------------	----------------------	----------------------

山驛無人影荒村日將頽佇立懷詩句欲歸意徘徊	聞之淚忽下下馬命一杯客中有憂歡只在得其媒	其媒何物是譬之取花栽非有歲寒約何以見老梅	寐物語 <small>同純甫賦</small>	兩國接邑鄰壁二家夜中相呼臥話桑麻他	兩國相隣夜話時猶如婦姑共圍碁西有竹洲東養	老江濃勝景好相持 <small>純甫詩酒非余取敵然余善辭</small>	異志 <small>の志ありあり</small> 軒 <small>の</small> 心 <small>の</small> 每 <small>の</small> 心 <small>の</small>	警深 <small>の</small>
----------------------	----------------------	----------------------	-------------------------	-------------------	----------------------	--------------------------------------	--	---------------------

昔の流の白糸より多しをのよひをぬるむとす
 為さずの多しを多ししを多しを望み消るる多しや多しん

不破関下共純甫別

不破関空藤水鳴別詩未就夕陽傾誰能再立関門
 起留得人為南北行
 関荒不破已秋聲却恨前朝君遠迎我向南山君向
 北嶺雲分送亦多情
 昨似山雲遠得連今如溪水分為派可憐兩國隔濃
 江隣壁霄相臥話

荒

和純甫韻

遲々無語下山雲関下忍為南北分更尽陽関一杯
 洒林暉猶見有餘燠
 將帰國寄別高田諸子
 遊滞西濃五十日養老隨君欲一攀々時必酌菊水
 飲下時亦採芙蓉還此願種々皆不遂忽向城市落
 塵寰已共養老仙子達又別高田諸英賢諸賢豈嫌
 吾入亦自傷仙骨不在芥
 出多羅山中抵高田望東方

買酒難登岸羨魚徒原願人從堤上喚我在艇中疑
望紫闥前例携壺非形期把杯忘客宿攀網喜軒簪
到處多堪記今宵最更奇歸家語妻子聚置謂漁師
冰室ぬ、後庭の涼床

蓮池

和名や 津島申 吹海の伊勢の風をすし 勢り
与下露の玉をさそめ物とあまの蓮の葉と花とぬ
先清め洗て蓮のすしと 葉と花と其葉と花と

田家秋子とてあそぶ

ゆきゆく門田の橋葉の白露の玉をさそめと夏あけきり

秋きり人歌ふみきれと後法

妻めよりとす抱ふ涼し 夏の涼も吹ちりきり秋の初涼

ゆきゆく門田の橋葉の白露の玉をさそめと夏あけきり

何法の夏夕涼も秋の涼をさそめと涼しきり

秋の立身まの涼も夏涼伊勢の山つらありて涼しき

夏涼山をさそめと涼しきり 秋の涼も吹ちりきり

将發津島伊勢主人惜別長歌并短歌三首

草枕旅人のさそめと涼しきり 秋の涼も吹ちりきり

多元如里あり

尔不悔してやある

近江流る何のなりとてさうさう之ん鏡山之小行かと先世より

書暫遊慢撫後

此行也。乘晴遊于淡海。僅七日來復。不亦暫乎。後

者錄途上謾吟。僅得十餘首。十餘首之中。發自四

結者過半矣。洲之琵琶。實而可哀。余常恨不得為白菊負妓賦琵琶行。

此行也。無日不雨。無雨不窘。窘中至苦者也。一日得

晴。遊于淡海。亦七日來復。遊中至暫者也。暫遊所得

僅十餘首。而發自四絃者居半矣。洲之琵琶。實而

可哀。白菊負妓。十歲泣人也。獨己。湖之琵琶。虛而可樂。

行基。天女。仲等。仙童。經正。白狐。此類皆虛。而見哀樂

殊地。擿撫。異調。獨余之客。西慢。心地。是所以名此

稿也。書暫遊慢撫後

南遊七日記

今茲五月廿賀晨巡視志摩伊勢諸
港余竊隨至師崎

二十六日晴午後至千賀君早艦一隻既

艤門前岸下損幟幕皆白地朱葵文舳
壚及欄皆朱船腹皆黑大雕蔓草粉
金填之前頭設一小室可傳而入戶障
皆擦金畫以花鳥室之屋又設席彫
欄周之前設小階榜可以上屋製極
牢固彫金鏤玉施工究巧是國初身

一所造戰艦以四四天名焉、左右腹、艦各
十五柄、中倉後倉下可以納五十斛粟、
鐵貓四箇、各重二十貫、四巨組以貫之、
長各五十尋、艦之屋覆以綠草布、若
雨、油衣代之、若張帆則徹中倉後倉、
之屋、檣八尋、帆十六幅、字縛字準之、源本帳一
隻、水手八十指、在前挽之、相距十步、
許、吹螺一聲、擊手鼓三通、以發水手
吧啞、聲與鼓節相和、未時漏三下、
解纜、今日潮漲之候也、方出熱田、

縛 王篇云 切辛 作縛 或

汨 尼三切

南風大競、止舟少憩、於是酒饌並下、
醉飽快息、水手房藏者、善酒、沒白
浪中、規一里而停、言笑自若、賀君莞
爾、曰、技癢耳、然餘勇亦可買日、全
暝、風亦息、即急促鼓節、凡徹夜行
十餘里、冥黑、不辨山河、惟星彩
粲、波聲洶、其舟嘈雜、不得
坐睡、
二十七日夜既明、風宮崎在日前、樹皆
可辨、日出波光接天、有孤舟自浪、仇

洶 許括切 湧 水勢盛

碇出續有二舟三舟凡六船競至是師
碇船脚聞也君之未各馳以未迎
土著之風可觀矣每最先者投綽
於我船船長急縛其綽於船首
投者見縛既畢回舟挽之二船三
舟後至者又投綽於其舟亦回舟挽
之分左右挽者艨艟共七隻船走如箭
船長立船首以紅白麾麾之以勵其勇
野間至所碇次第開豁諸島競出
賀者一一指示大尊小與或出或隱至

幡頭崎四天之艨皆閣之以任七舟之力
水手攢立後倉鳴之聲身息鼓節始
變於是歌起船行搖然食時達師碇
既浴盥又飲饌于後與良悅出拜幡頭
神社石階層層自海濱上小樹叢生不
可左右謂王樹間下瞰則石磨峭立豁呀
噴浪良悅懼挽我拜既畢自改中下
仰見則崔懸者執力皆欲墮脚不可
留趨而過之林麓下榛莽中見一大顛
骨方面六七尺者似木根枯朽者向以

知為海竊顧背又右折上者三四十步
至日和山中央奠一圓石刻山方位更
進而登又將而下向鄉人望遠是所
在曰近在石頭余終夜不寐午醉亦
發脚麻皆汗汗不能行良悅扶掖
以登徐至最高頂渴甚見有家趨乞
飲其家即望吏家助所居午炊方
熟茶亦可掬須臾盡一鐺渴始解乃就
望遠基具遠望眼鏡一口鏡可望十里國
家置觀望吏二人日夜候視以備靈舶不

是處港見為尾張第一防邊登之則

三之嘴咏于南志之頭擗于西神鳥盤

踞其中心土俗謂之渡合土阿伊渡合外謂之

大洋此際海極險高舶審測風潮之候然

後徃來若一遇颶風輒為奠奠渡合內

一火天池也右盼則志諸港

兩宮之櫺窗葱松阪諸山陸續趨北左盼則

奧殿一望帶至伊良良遠迤走南大島

小嶼布置中天大島三為篠為日間賀

為仇久々屬三仇久之傷疣著者為

迤迤與曲

楫寫為姬寫俱三之有也。餘條日間賀
屬尾小島則野島平寫大磯小磯松
島木島嵐島奈賀天都俱美惠比壽帆
源書帆
之汎、檣之真、不暇目擊、倦而歸、日
晡賀君道遙、近自後門出、余亦踏馬、改
斗險、不可登、匍匐以登、捷徑直至望
臺、迢迢暮景、倍獲午景、賀君詩成、
余即和之、又西北行者數百步、至一廣
溜場、可容萬人、之衆、後高前下、可以
建、磨、可以張軍、如蜜船進港之日、此

頃可以一臨而悉、祈如如今日、神風不
可再恃、夫兵貴神速、先塞參志之口、
渠在括囊中、此頃設數口、大煩、以大
彼艦兵、不血刃、一戰、塵之、噫、談、行、容
易、烏、薄、暮、下山、是日、進、生、棘、鬣、者、十
數、尾、鏃、劔、手、不可、交、矢、之、膾、之、大、嚼
快甚、

二十八日舟遊、篠島、良悅與行、海路一
里而近、如往日、間賀、半里而遙、崎島
之間、海極深、水冥黑、如風日清、怡

呀 張口切
呼 張口切
吸也

猶呀呷，條與亦島相離，遠望之如
一崑，及迫見之，各分為二，亦島崔峙，
不可維舟，卒逢，乃云在傾，此難傍
者也，聞有木客，栖息其上，條崑亦險，
一港北拆，石壁左右抱之，各五十餘步，
以防風波，人家接港而設，比屋皆瓦，
以備颶風之暴，地頗豐贍，人尚豪華，
圖鄉一百五十六戶，千賀氏所監臨，余
不共，里正相知，使駕師先容，里正即
出迎，至玉林巷，我尾無士庶，有罪者

危一等者，竄流於地，國家年，給衣
食之貲，以終其身，蘇死肉骨之恩，
實不可言，夫罪譴者，天地所不容，
國君獨容之，德豈不洪大乎，庵主
下茶設菓，水味清冽，其所由，曰崑在
古井號曰帝井，建武間

址 于坎，皇居之址，在東北隅，
義我東王，發樓船以東征，遇颶風，漂

祚 王後踐祚，是為 後村帝水，其
帝所汲，款出門，喚前所捐舟，自崑

同出，鳥已去，小磯乃來。李加天續至，
都俱美羅立其右，日間賀自此出迎，島
之中，凡二百五十六分，東西里，既出延出戶，
不見往來人，唯小蟲八足似蟹者，躁々亂走，
脚下耳，師崎一帶面東南，如東南風急，
陸路為海，賀君之先，置石為岸，一帶出海，
凡百步餘，勢似鉤曲，雨未無風波之暴，小
艇往來，諸鳥者，上下以便鳥，然日賀君展
正衆奇先，焚々在須佐村，朝出未歸，與
良悅議曰：賀君近卷，細君，褰衣哭婦。

君謝君切
火上出也

高亦作黑
火火也

想君高博情，其不可忍，蓋行尉之乃決
起而出，路由山佐，崖山岸倒懸，仰見瞻落，
潮頭始進，駭然有聲，夫潮汐自大洋
來，突進須佐，其勢迅激，山崖岸多崩，
是以有一崖二崖之名，崖之下，崎岨待者，
里許，潮漲蹊塞，乃轉入山窮，又降，是
為須佐，匯江為知多，茅一名勝，歌見
萬葉集，一帶人家，曬網編蓬，途遇
賀君之歸，相嚮，咄然迺談笑而歸，
一路海濱，貝殼，彩石相半，踏之

沙有聲既歸海雨將至溽暑殊甚
人皆浴海余不能汨踏底行者數十步
至潮沒肩乃返晚饌太美海物錯陳爛
醉不知夜雨滂沱

逢淳真白

二十九日且陰且晴拂曉出門彷徨海岸
水烟滄濤崑崙難辨後有呼者曰海氣
劇顧侵人不可久駐劇視則賀君之老伊
奈翁先在墻陰胡王海而座翁固高
陽之徒起卧不離杯棹印飲所不
辭即倒二壺酒飯後賀君意

劇顧
字予

出門余又後至見人以生鹽一撮塞沙際
小虫穴向其所為口點而候之頃之竹蟻
跳出乃撮取之生鹽塞其口在蟻則以
為潮已進乃跳出夫蟻之為字為蟲之聖
之具然乎迂而西者數十步至幡頭岸
下潮半既退怪巖盡露尖而豎者坦而卧
者如屏風者如盤盪者才圓者突兀者大者
小者公乎走海中白浪噴沫其間怪不可言
或疑立而眩視或猿投而疾行牡蛎無數
附石剥而食之味極辛鹹有取沙嚙進者

一色斑紅。夜飲斫膾，以春前物，少減鹹味。正是鼠頭魚之候，余有釣癖，午後借艤，并請水主百指，以至皇天瀨，在幡頭之南一里，風猛不可行，乃三四百步而止。海深既踰八尋，我徒時出釣，尋常汙瀆，小竹竿而已。今抱管大之絲，臨不測之淵，戰兢意不在魚，不可獲固其所也。舟人所獲，輒除鼠頭外，鯪沙與牛尾章魚之屬也。禹貢云：海物維錯，可謂千古之聖博物。既備矣，晚酌大酣，以朝來所捕為饌。余謂賀君預偷四日之暇，以從

遊焉。山海之壯，四日既盡，請明早決歸。賀君悵然曰：渡合激浪，鳥羽清麗，要師好詩，應接之，豈不欲乎？余曰：身有分，官有額，不可奈何。且記云：欲不可縱，余歸計決矣。賀君更命厨人斫一大棘，鬣且勸一大白，又命取水手善歌者六名，棹歌以餞。大醉就寢，晦微雨，余欲辭出不忍，欲留不得，彷徨者久之矣。賀君睡起笑曰：師尚有為，命下盃酌，傾三盞乃出。取路東濱，歷片石大井古布諸邑，至河和兩甚，取捷徑，神上野間。

南瞻風宮寺，一帶翠碧遙。出雲端，沿大谷
崖下登鴨崖之頂，兩景可觀。晚至常滑
投宿真福寺。

六月朔，朝雨連甌，不可以行，乃留一日，使僕
與助先歸，禺中雨晴，快飲無所為，與鶴
出崖杜多，訪陶工長三，所居小飲而歸。
二日晴，五更起燈下思詩，鶴出崖蚤起，卒然
請今日說詩，就見余歸，裝既畢，驚曰：
歸裝何為？貧道以月之望王赴府，乞師容
遊至月半，余笑曰：一日百斤，積至千四百斤，

呼
蒲明切
呼聲也

我不可留，哄然一笑，遽呼執飲，候門戶關
乃出，鶴崖送至北條，亦村至古見，瀾海一
路，迢迢不見行人，余少時以詩遊南郡，限
寺本不以南經之，當年所周旋者僅存
耳，杉江令吾業醫，數村當年一書生耳，
今訪其居，其女既適人，不知余也，余笑似會
一笑，抵堂下，橫湏加貝買船，順風張帆，殘日
三竿，舟達熱田，了。

南遊十五絕

海上

日永寄

奔馬來風激，白時騷然無暇及。思詩天
低接水唯星彩，擊手鼓聲神和崎。

放乘七發云：混々沌々，狀如奔馬。

又

百指一高叫，呖聲相追徹。夜踏波行投盃
時上桅樓望，木曜如珠悞啓明。

風宮寄夜已明

迥碧過々既白時，山收容雨務放朝曦。寫

迎嶼遠船如箭過，去一奇又一奇。

師寄

航海南來地軸窮，巖凹樓後身松風。光
不異年光異，父子雖殊父子同。

文政辛巳秋先考隨良甫君來遊此境，
一幅裁七體詩，掛之壁上，故有此感。

望王遠臺

崖懸心嶺立，海高天大國防邊。有以全世靖
夷靈無一事，可知船將日安眠。

薄暮再登次賀君詩韻

再攀石迳夕陽明，勢腹三腰一望平。嶽巖
構椽文選九辯云華葉落黃天邊無鳥影，構椽樹杪有帆行。

白亦長

條崑崙拜園田氏墓，在玉林寺

石壁峭邊捐小船，玉林情話淚潸然。茫茫
滄海尋無處，一片殘碑十九年。

從條崑崙至日間賀船中所見

里昏相送下汀灣，撐出懸崖亂石間。參嘴
志辰月相對出，大洋風死浪如山。

小依濱

怪姿奇象祭光明，自古人傳錦浦名。沙去

源書祭怪字

汰未淘不定，落潮鐘作玉珂聲。

取竹蠅王

也識魚痴可欺，落潮沙渺步相追。海
霜一撮鈞何及，帶殼抽然出穴時。

豁呀谷空也

幡頭寄拾海參

誰知客海南，羞靚有此喜前味。

出師寄依信立君錢別詩韻

水好山奇不厭來，臨歧又勸雨三盃。南風
細雨東濱路，只著濤聲送我回。

夜宿常滑真福寺

山腰盡處即柴門，沿海歸來雨又昏。酒
有青春多禮次，清言妄語不須論。
一觀遺墨淚斑斑，不改風光海上山。十六年
前猶若昨，文心酒量共心閑。

文政庚寅，喜先考南遊，一宿于此，壁上留款詩云，
投宿今宵受真福，文心酒量共心閑。

橫須賀買船

綠園行館尚依然，午熱如煨笠影圓。慣海
不知航海險，破帆風底倚船眠。

畢

膽

想忍高情愴，其可忍蓋行慰之乃決
起而出路由小佐，崔岸倒懸仰見瞻。
落潮頭始進駭，然有聲丈潮汐自
大洋未突進，須佐其勢力迅激。崖
多崩見以有。

低一作修

獨酌

對影作三人梅花又有神
三盞通大道何物不常春
蒼月斜低戶林先白向晨
羅浮夢未去趙子忍前身

歸暈

嶺雲如墨雨亦風
送凍颺烟氣濃人

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

立津頭秋水暮，行翠郭故山松。

歸田與六野三邪二君同賦

兵士出佳醅，年夕且肯溪生兩穴魚。
茶有中零水，披被呼湯婆，怕園問蜀婢。
秋風佈古來，千古張平子。

同次前齋君韻

學頭瞻衡宇，寒日照秋田，行樂多餘暇。
歸來及暮年，舍奈夜酒年執道。
遙編鱸膾典，葦美吾如有夙緣。

端午前一日有感寄元女學

千古寥寥孔大兒，平原處士有誰知。
心如日暮途長客，貧止山窮水盡時。
膏雨蔓生烏斂草，暴風摧却赤楊枝。
邀君快飲端陽酒，蘸甲通觴百莫辭。

又

梅雨滴瀟女，來簷牙啄吏燕巢。
忙明朝欲斷君憂盡，吾有盃中劍葉蒿。

許曰：蒿而有劍名矣，劍能斷物不斷憂。

况有葉平唯益中物憂端悲緒無不斷
者無劍石而利於劍吁至德年哉

又寄尤文學

無錐可立拂衣難歲月因循鉄未彈
四十青衫舊學侶之子白髮新儒官
人間稍惜名招禍醉裡寧無地極歡請看
小園風雨後蓋淡浮畫海樽殘

醉後自述

酒榼淋漓醉晚軒
齋隣古寺免聞喧
謝

賓猶設童蒙帳屏跡稀登顯貴門
亂對朱囊花抱子吟
松風尾竹將孫人生
笑口無他術只合香醪泛滿樽

遠之故人橫
杜甫乙酉首春見賜寄豫之

詩去而次韻

句曲之巔有地仙
吟風嘯月久修玄
吾歎此中同妙理
塵凡踈隔恨年

送孫子游漢唐先

孔泉瀉處樹葱蔥
一度曾游夢寐中
君

行試 望竺山上 礪鵝湖心 天女宮

道遠館九日集

而齋西山爽氣新 百負詩社卜佳辰
湘纍餐菊應今日 素草烹茶念代晨
秋月盈 滿草露 涼颼丹 吹江蘋 道
逢館上 千鐘酒 笑倚明 今年八 衰人

題畫

嶺藏幽洞路重 翠壁千尋幾 先松人
立溪頭有瀑布 泉流遠在 白雲峯

讀朝鮮軍記

長驅直到綠江邊 士氣如虹 中北燕 天倘使
公數期 壽看鞭 恐在 韃韃先

白板殘畫海棠開 羞看春霖 長綠苔
日 幽人無一事 閑忘 聽雨醉 芳醅

余昔游象尾山 採八壺 溪歸宿藤
浪里伴東湖 家賦七言律 有罪根
未減 將歸去 紅葉香 若不可 論之 句而

此二十六年於今一夕懷舊情切賦
此以云東湖之

八臺溪上白雲樓，只有平生夢裡游。何
時得到仙源去，紅葉青苔二十秋。

西湖白梅

一顆白梅及我廬，孤山處士年栽餘。醉
吟暗香浮剡句，中宵引夢到西湖。

內海懷古得蟲

猛將餘謀尚在東，迢迢當日大名雄。保平

之際無倫理，勝敗何須問異同。張海潮聲
來忠勢，柳堂秋樹撼悲風。如今遺得千
年配，化作無腸鬼面紅。

維印亦有旨，甚更值月未邀。近自探花
運，吟憑待客榻。執觴浮蟻綠，洗硯淙
較銷。酒醒人還去，秋峯二點遙。

宣其毫與歛，硯携古下松坡。澹木集寒

鳥輕烟依綠羅維。溪隄珊瑚珮。嶺邊燈帳
蝶。月兒人共出。清風在夕何。

花下飲

解道小年不若大年。醉顏笑向仲春
天。桃花淨盡。棠花盛。每年併處。花
眠。三石杯酒。湏一口。千古誰如。古白。問君
平生何所志。君言道。道。道。第一。明。明。明。君
君。若我。君莫。莫。莫。琴。琴。方。無。無。無。

夕嵐收處。下長堤。藤竹深。佳且迷。水。幽人
鳴玉。碧山。少。巧。二。梅。雲。倚。眼。中。非。復。人
間。界。醉。裡。裡。臨。席。子。踪。他。日。胡。薛。塵。羅。去
一。年。華。盡。空。向。烟。溪。

和王絮

余飲量倍於春。夏而居。秋冬人因
與二氣相消。長性亦有不可。平當然
耳。折。吾人。顧。榮。力。言。白。酒。誠。消
夏。亦。亦。其。和。何。顧。榮。遠。士。而。亦

家
亦今朝

卷之三

四海家。榮經王。幸魚橋。抽篋新膏。
湖明偶與杯中。謝於眼。有人醉鄉。

春日作

雨洗桃花霽。色奇。帶素齋。上曉吟
詩。良辰美景。今將半。摘之。榮榮止酒時。

送別昭文遊南粵

神在笠。健彼一時。五壑。以上永無移。
林寄文。庫書如海。玄必試。得一古奇。

初舟去。向五壑。門。莫令飄。似得仙。湖水雪
飛。乘海浦。晚霞光。勒冠。幸。巖。人。競。唱
許。那。曲。歌。妓。爭。傳。好。代。篇。若。位。馬。若。相
詞。賦。常。春。日。枯。枯。賦。

侯請齋。君。喜。法。聖。者。酒。若。法。館。

琥珀盈中。酒自清。法遊。喜。值。二。難。并。吉。獲
水。底。鱗。魚。吳。子。里。湖。中。葦。菜。美。痛。飲。播。今
食。美。韶。元。莫。道。後。開。極。松。流。甚。解。滑。水。

蕉窗精繪

今日清兮可濯纓

夏日偶成

蒲絃棋局夏雜消
園日稍移鳳尾蕉
十字街頭兒輩集
晚風吹送賣鵲簫

酬三河某生次韻

桐葉蟬飛鴈未賓
憐君海上寄書頻
相思
恨流水月斷南雲
百里溪

又

羞殺將余比馬卿
讀書三十尚無名
迤來多

病徒五似不系
茂陵賦集成

林日讀書于常林房

林柏森、素蓋宜宮
丹廟映藪旭輝中
朝來
靜室淡煙處
送清香不居風

湘靈鼓瑟

水宮無刻日
暝投紅蕖行
為煙孤島沒
以月
數寄青香、
家山遠涉、
溪淚零哀彈
清夜由琴古
感湘靈

燒宮山寺

松栢生蒼蓮清鐘古梵宮碧潭涵東
月出洞動悲風俗洛館玄笈山欹松遠
公溪亭晚先道人睡水香

山中訪隱士處

遠自秋嵐臥玉尋川竹如風自栽菜
園煙鎖讀書幃枝底香皆宿運道人
車馬為霖霖如石下步月思仙

湖中對酒

美頰琵琶水香宵載月舟村浮天女島

真

湖橋希王所賦執三盞酒飲清千古愁
吟風思長夜初對石山樓

蕭蕭之游
蕭蕭初雪見贈彩霞世苦宿和為嘗有

名山片地四張又得律風蕊之吾園多三彈侶
吳唯起消人方為北太白丑斗一足別偏
况處以我人何如歸亦物

梅南食小飲

天竺玉開在水偶有僧和真詩淡

中非昔海鏡 啼鳥如暗千行
向晚十有六 佳賓思自
殺清軍半日身 應砂久醉

牛館對酒

月出疎簾外 新沽得意時
故人半從飲 前日醉亦初
梅初水初新 梅色露底枝
流年多所感 涼雨未嘗辭

了序

家山第千百里 為客幾秋風
又對五羣

為潘之祖善序

知子之志也 知子之志也 知子之志也

六月之味 字字及後 再與自法

法爾飲 飲之及而 既月結 結其法

志

黃字淡白 日將晴 書日梅 似醉 西至 別書
種既 合宜 瓶中 探出 亦以 隨

初秋 求在 陽名 何省 之身 見訪 留酌

秋懷 以子 滿亭 草一 盡同 蔬酒 酒杯

柳葉尚含涼氣色
初晴月動水人
才亦看宋玉然
所之報多安仁
德與
中亦重因盤但
短髮行雲白露
多生家

道技 得金車

此生何術為名
人至歌舞筵中
一忽買
心下年經恨
年年也備在
銀車列
有音

客中遇雪

銀

湘南雪片若花
湘水天西海
欵曲數百流
流
短十的載蓋
閣了不奈
素衣家何在
倚棹忙昌
慕然聞欵
欵乃

小飲

一斗和邀
支冬三
從去淺酌
竟成醒
未足
道德他年
學復亦
形骸醉
後後
訪社
憐
天作道
小鷗
豈與
爾期
樽角
胸中
一
今澆盡
月在
希
淡若
厚源

和梅無功

思君百尺且思遠
雲外書只幾
白之為君百
做只書東中
待長回

秋夜寄隱林友後

西風搖
整林
帳對月
綿
別恨添
坐
久苦
蟲
本
場
大
夜
涼
寒
露
及
中
書
盡
一
身
吾
言
官
治
罷
二
頭
何
用
他
了
占
近
代
傳
奇
意
可
孫
軍
箱
乙
夜
讀
此
算

淵明

結
前
先
生
語
前
後
無
事
者
繼
其
清

吾
解
秋
收
事
各
自
其
君
千
載
比
高
情

莫
知
得
以
字

青
香
子
的
多
多
遠
事
竟
幾
月
軒
以
彩
能
雙
水
疎
疎
的
沒
的
活
燈
波
處
似
桐
江

秋
泊
湘
江

九
折
才
流
似
是
秋
色
又
三
湘
多
古
江
如
恨
十
回
屋
子
騰
空
浪
急
卷
雲
屯
水
為
鄉
髮
別
亦
蓬
時
顏
花
度
滿
吹

改雪白櫻皆偃蓋問松香危即天凌

十題

秋風吹度秋江浦江邊秋影雁字數
秋風如湧原何人亦方安任存老杜

友人飲

友人志事我出柴門三就謝家語一云煙鴉
共日枝掠杏子翠華星初菊刈龍孫應翻
孰的月對平但逢秋氣子冰魄乞月
涿父安臥芝於柳島與苦吟

柳梅

早標時節才雲忽涼短棹輕蓑野水滄
一片山濤子處可黃昏素月問前林

奉次

不栽他樹栽梅樹幾自林塘遍野塘北海
樽中新綠酒羅浮月中好春光人生易
老在非久吾醉欲眠歌莫枉誰識暗香疎
影裡飛揚似伴夢通莊

壬子夜月書懷

把酒看青三月前
梅花影裡玉陶然
千金一刻去休費
飲酒眉上字士篇

九日得酒字

棠里又書得
角餘門外折柳
浮滿把花
六此盈觴酒
三合笑開顏
莫論絲亂首
對飲人無復
若時友

江其社書得酒字

澤陽亭畔
乘秋花月
陽江流
酒家白侍
長歌千載
淚欲浮
激灑聽琵琶

琵琶

遊人久名歸

泣望層之
顧白雲
煙又煙
五維千
空路
奈此自
何欽
一自
中揮
手
二角
菊味
借命遊
浪且
高懷
命竟
應亦

贈上野書

梳是若
梅花
空
亂
帶
其
云
忘
曉
起
好
影
題
清
時
強
記
張
安
冠
瀛
海
奇
談
利
泰
西
輒
翠
羞
易
同
生
拘
柳
攻
難
執
若
西
風
掃
開

明目行樂^散一試驛駒碧草蹊

歸田得白字

夢寐湖南綠渚邊
中秋開却水頭田
身是東窗歸客心
似吳江通去年
香草玉簪^特遊子
孤山笑在有人船
依

奉贈知不足齋先生

投記相州都一驚
高僧曾說指先生
易於輔嗣五月吳
詩與毛公互不評
孤鷺

首霞片三去
去去大秋水悠悠
清校離今

二

看書上海華如椽
當好可鬼名得仙史
象秋成班鳥考
玉風振起老莊編
新遊
近試青苔步
并飲時信曉月
前尋少園
新多逸韻人言
古洞似真洞

三

學士胸中無宏物
登壇掃落語
逐豪

城川在瀨獲同慶四汝唯君春斗高

林館社懷

凄風撼庭樹時近授衣天如枕寒燈下
歸心過雁邊 征途猶杳 浪迹幾年年
壁上舊題在 家山未肯緣

明北曲

燕雪漸冰道一白死一古胡天不復歸一自

紅顏似白草一獨留青燭在重城

又

先生好之有

天山名宿居長壽 龍虎常居一石中
溪清衣響幾十年 家學變多現於白屏
宮隔

城。如。行。

城傍溪澗石中流 溪聲為十里水琴
秋雲捲繞溪邊寺 蒼蒼自是危樹生
竹。值。才。盡。人。信。自。首。最。鐘。情。
目人能在亦那能以挽 其地挽

影天

獨得後字

幸之風雲安擬王侯點：清光淑鏡流夏
想千維玉堆新玉風曾照石家樓

秋夜懷人

隣人贈我一尊醪
酒榮桑無德然回以誰汝
竹影星光迫月升
夕懷君、少訪清風一花夢
情白

蘇雪耕集

釣魚作更光

彭澤休官日
農課事還忙
婉偶逢年
之芳林教授

釣魚灣上雖魚凡
佳句教紅憶
方音如放牧
估道吾爾福

氏之子
與子印
今名投

與子印
今名投

蘇雪耕集

出明否觀時目也康不知能心何用源聚念物與只自

消一碑總

願之凡訪中多之是孝聖教人廣慮消
為忠清美善水為教斗千里過托飛鴻
自許云向存法道也

橫
卷
第
一
冊

為大橋綽堂題其雲藏霞映卷端
有溫泉之地山水多奇浴者亦多奇士篤
疾廢疾者輟而不論擔風握月之徒托病
遊烏者亦以山水多奇耳秦皇浴驪山明
皇幸華清豈其疾而其泉乎哉凡山水之
美草木之麗悅于耳目溢于詞賦不知疾
之所在是以衣食溫泉者頗亦致富而苟
能伎藝以能通上下之情以能款待迎接
余以溫泉為養性狹耶但之城崎攝之有

馬殊為狹耶之魁綽堂近浴城崎温泉而歸往未十數日唱和詞賦裝為一卷披之則山之甯鬱水之潺湲琴歌酒賦之繁蔚晨迎夜送快樂使讀者形神俱往余未識城寄之勝然卷中詩賦皆有翩：飛動之勢則知山水之助處多矣就善詩巧聯問其人名則多庸醫賤賈之輩然風操清麗若許者果垢滓日去而清虛日未者耶將勝地使然者耶是未可知東坡居士評文

與可畫竹云胸中有生竹余於是知温泉之德不在於彼而在於此曠日彌久余一遊其地質余語爾

六七山房記

灑本屋彌八

六七者何山房之號也房之內方一步天地七尺而止經史稗官堆積其隅筆墨紙硯陳列其間若夫暇日無事同操之客適至筆歌墨舞逍遙于其中矣器械諸事近取于左右皆逢其源不煩使令不厭躁作

可謂六七之內坐有天地矣若彼四注圍
焦之設徒取于觀眺耳此居不然撰于屋
舍庫府之間數步之外不可見而遊此中
者如遊名山勝地是斯亭之勝也出室數
步豁然明朗城市繚遠東南山川連亘西
北郊野之富松竹之茂并包于百畝之中
是斯園之勝也然房之設不於彼而為此
者取不取勝而取勝之勝耳曩李笠翁之
居取十便十宜此居得無近似之乎余於

是亦云時天保庚子臘二十有六

松竹梅菊圖說

為三好屋半右衛門

梅之清奇潔白竹之瀟灑勁直菊之幽香
佳色松之磊落是文人墨客所鍾愛
鄭重者磊落宜冬幽香宜秋瀟灑宜夏清
潔宜春然松竹貫四時不改節操梅菊偏
取一時可併觀斯四者惟有畫之設耳夫
心原虛應物無朕對嚴師友則思虔敬入
歌吹海則思佚遊是人情耳苟有守內心

有與物合體用何能不自觀時目也

不外馳外物之未皆應于心之靈譬如梅
菊取其清幽松竹取其虛勁凡山水花卉
皆審于此取于彼宋儒有句云萬物靜觀
皆自得四時佳興與人同是之謂也三芳
亭文石近開茶肆居室宏麗余一至其室
壁上掛畫四幀京師寓客梅逸所製松竹
梅菊各為一幀文石乞余讚一語於上余曰
位置充塞何費讚辭雖然余亦有說語取
山水以喻壽樂詩取棗梓以喻恭敬然則

取斯四者以為必喻不亦可乎文石幼時
遊學我門既壯好遊四方書畫雜伎不學
而能之其學雖成客氣未除而年及而立
父母俱老於是幡然有改勵之志可謂傑
然自立者勉而不惰則清潔之守堅勁之
志有如斯圖因記為誡

松宇記

國枝成卿新構小室名以松宇庭有老松
祖宗所手植嘗遭回祿此松獨完故取以

為名。余惟夫物有盛衰。時有利不利。以物之盛。乘時之利。是商賈一旦勃然與起者。出人不意。并東兼西。府庫市廛。充溢閭里。人以為榮。謂之有德者。然不二三世。其家忽諸者。何也。蓋勃然興起者。其勤極勉。其守極嚴。不利不利。易意。夷險一節。克己省欲。遂能遭物之盛。乘時之利。以致不貲之貨。然其人不自以為足。亦知勢利不可恒與。子孫不可恃。預為之備。其備不可廢弛。

然其子也。魯其孫也。鈍生長富有。不省視財之所生。生於辛苦。人以為榮。自以為足。勤也。儉也。不以屑意。逮一事既蹶。二敗並到。東并西兼之家。漸落於他人之手。竟乃府庫肆廛。貽財足者。大木之斷。尚可以為榱。然傲惰為性。不可卒變。一旦所儲積。共待耗失。殆盡。則不得不仰食於嘗所蔑視者。由是觀之。不亦勤儉起家。奢侈失之者鮮矣。易云。濡有衣袽。可不慎乎。國技者。邦

之富族也。其先克勤克儉，成立一家，逮四五世，不免自足之責，遂受敗舟之禍。成卿乃其支族也。為人能勉能守，不墜祖風。其居湫阨，今葺補數間，以為閑居之所。其室非讀書點茶之設，為譚風月之所，非必為風月要在，偷餽刻之間，審容膝之安，身容膝之安，餽刻之間，成卿其有所思。林泉花月，世以為風流，我所不取。求名營利，不辭雅事者，我亦不取。夫家業未振，振之在德。

志慮易佚，戒之在忍。妻孥仰食，接之以寬。物價貴騰，處之以儉。勾當未盡，虛坐恬靜。苦茗一碗，伸脚厭蹇。一室之內，是我天地。其樂洋洋，予不可名言者。余嘗識成卿之為人，於未冠之初。果能以大孝名聞四方。蓋由不以利不利為念，而能夷險一節。勤儉從事之故也。余入其室，信其言不誣。庶其孳孳不倦，則綿瓜瓞之績，有望後世子孫。世有不知成卿為人者，因記實其事。

天保辛丑三月

復鈴子昌

蓴本作莼詩作茆倭訓奴那和朱註鳧葵
江南人謂之蓴菜又名鮑蔬草馬蹄草詩
家謂之絲蓴錦帶水葵露蓴稚蓴懸蓴九
十月麤硬者謂之瑰蓴正字通蓴入秋為
油蓴凡蓴之質軟滑柔脆三四月間採者
最為妙尾城池中者為最上乘然非經輿
臣之手則不落他人之手子昌饋貽一籠

有人難參仙贊曰心者
目之主云是於我感
焉請問其目蓋目萬
物所寓隨境轉者夫轉
念之生微矣至於施之形
骸抑未几好惡先萌志
而情動于中若夫目力日
用不知故是非得失矇矓
何甚或曰彼屬性於五色
心固令之而非此耽者何
能別物之醜而曠雖聽
不知于都之妓西施雖美
廢極見之必驟目驚故
也有情然我昔位胥扶
目懸吳東門越車至
時明尚歷是無心而
觀者也予復有說乎曰
否離形去情默明別有
明是非子之所知焉莫
出

尖新而肥所未嘗見者於是下羹兩日鹽
藏十日味俱不可言知是龍田所採龍田
在我海西敬公始所墾闢稱為膏腴蓴
之美良有以也因備錄蓴之名稱併謝

久米仙畫讚

心者目之主主正則視正勿視之語眸子
之喻皆是之由也人之慾靡慢為甚若內
不正則外易移可不慎乎可不慎乎

韓信贊

夫王孫而仰食於漂母豈
可忍乎與彼怯笑諸市者二
者不可勿執而止焉謂嘲我者
則我雖有饋我者則德我者
者也德之與雖雖異於夫夫
心所愧也適暴秦失鹿英
雄割據方此時爭衡中國
雖匹夫可力致焉是以自抑
完解也若使之於治平之日
其動未可知矣余以為世之
論信者有兩未盡之市上
之德不報怯而終焉漂母
之德不剛恐傷我廉即
偏棄其一怯乎女捐于行
蓋其進止於熟視時千
萬思慮苦矣不過于權時
勢身國士無能文唯有蕭
何識矣豈其自臨見下如
蕭何乎人莫注目見矣
字知當其受
讀時不熟視
之文不當載之
今吾補焉

韓信怯當日所以勇後日也少年侮韓信
所以畏淮陰侯也苟人識別勇與怯於所
遇忍不可忍之心於其所不忍而能不羞
始終之節者庶其有成大誓曰必有忍其
乃有濟想當千載上為韓信發

遊金花山記 己亥十月

金花山南東北三面斗絕不可登唯西面
開三道表為七盤背為百盤中間一道極
險為取水捷徑瑞龍寺山揖其南諸山環

列其下連亘數里金花山傑立其上兵革
之際苟一賢將據之雖百樓季不可輕犯
慶長庚子之亂秀信誤黨石賊戰敗而降
德與險所持不同校童之敗蓋自取之余
聞其勝者久矣徒讀紀聞之書耳今茲徒
為散官家居無事欲一究其精詳決以十
月三日發家自圓城寺絕水曾川斷山一
朶蒼然當面金花之名不問而知矣夜
投宿雷門之家拂曉微雨與雷門伴出一

夫王... 則我... 者不... 心所... 雖匹... 完... 其動... 論... 之德... 偏... 萬... 勢... 柯... 蕭...

峯北來走屋上者百二峯也北行五十步
右折而東至山下常在寺在其麓仰眺則
怪石如虎如豹懸在半腹下垂欲墮脚不
可住出寺坦夷百余步即就金花西麓徑
入自七盤百數十步山低而下謂之松田
若稍上稍險又百數十步圓然隆起者
謂之武藤圓松田十太武藤以十俱秀信
禪將各據一險經畧可想路未半山頂雷
門備甚箕踞石上曰余生福土平常無他

遺憾唯不免時為他賓鄉導上山是一
苦身相視失笑乃扶掖而上至小平地云
是所置火藥庫石礎尚完當日戰鬪藥庫
火發一山雷震者是也自百盤入者路合
于此進至懸門石壁嶮巖鑿以為門庚子
之役余九祖世裔島太兵衛為正則先驅進
逼懸門懸門發乃手揭之擊門內兵斃之
事在庚子戰記入門路輒坦夷體始胖汗
半收乃徐行不知元是調馬之場峯立

夫王
者不
則我
者也
心臨
雖不
完無
其動
論信
之能
之德
偏
蓋
萬
勢
何
蕭

路窄無馬埒可設些子坦夷即為馬埒長
亘百有餘步綠崖一曲乃內外往來之地
也忽達一阻隘怪石砦或起或倒攀緣
而上云是所設樓門門內即城將所居其
險今尚不可踰况當時鐵騎三萬旌旗蔽
山然秀信驕怙不信百木造忠言以興
無名之師身竄城屠古云地利不如人和
秀信之謂也樓門之側有一石井水如碧
油去平地凡幾百尺水在天半歷古不涸

可謂一奇樓門所在與天守臺財隔一溪
是以自谷底疊石築起作一條平路左右
懸絕百尺俯瞰目眩內則豁然平潤可構
屋舍十數間又一層屹然突起其上者天
守臺也登之則數州土壤如在掌中長良
川一道界破其中日力未窮樹間有聲呼曰
珍客何晚酒熟羹熟速來一飲就之乃有
三人列坐苔上倚有三人調羹行酒各帶
醉色問其姓名噤而不答者藪豐盛我輩

夫王
者不
則我
者也
心臨
雖不
完能
其動
論信
之德
之德
偏
蓋
萬
勢
何
蕭

三人備歷阻險脚麻曾喘無水一點可掬
盜泉且不可忍况此旨酒輒就其招連啜
數碗抵掌称快雨且至日既晡強辭而歸
跡此三人吾尾賤臣檢視舊場至此酒饌
之美皆出于里之膏血余曰牽牛蹊人之
田不為無罪余又奪其牛暴如之何雷門
捧腹笑不可忍自藥庫址右折而下一曲
一折百盤不已前後頂踵相接秋冬之際
霜樹如染懷顛蹶之恐不可轉眄幾近山

麓醉步難住凡顛仆者二雷門勵曰麓之
周回七千五百步達智洞在巽麓慶安間
確井岩入所隱猶存巖居之跡鏡岩在北
麓下臨長良川千帖臺在乾麓各一奇觀
也君不欲遍觀乎余曰備不能天保己亥
冬十月記

夫至
可忍
者不
則我
者也
心誠
雖匹
完躬
其動
論信
之德
偏重
萬思
執有
何也
蕭公

竹印

石川吉信墓誌銘

石川吉信墓誌銘
石川吉信公諱某字某
公生於某年某月某日
卒於某年某月某日
公性剛直
忠於君親
其行誼
為世所
仰慕
公之墓
在某某
地
此誌銘
以誌
公之
功德
云爾
某年某月某日
某某人
撰

夫可忍則我者不
心也
雖匹
完躬
其動
論信
之德
偏
萬
勢
何
蕭

石川朝臣主馬佑吉信公墓誌銘

惟石川之先出於孝元帝之皇子彥太忍信命
之後也與武內蘇我支別而扶翊皇猷參贊
朝章中世藤氏蔓延而皇列衰微石川氏族
亦或為武人或落民間公之先祖隸於三州
皇考信光起於畎畝之中攀攀源大相國龍
麟大有軍功三遠駭豆之間愈服驍勇維時
列國用立北奈强大屢侵邊境大相國令松

夫王... 則我... 者也... 雖... 完... 其... 論... 之... 偏... 萬... 勢... 何... 蕭...

平周防守據沼津城以信光為部將任遠江權守
有事則信光常為先鋒天正辛巳歲生公於城
中諱吉信號主馬佑以為部將子故也北奈既滅
大相國領束閑八羽以三勇羽林中郎將忠吉守
忍城羽林生質魁悟好能愛士公幼而英敏羽
林嘉信光之勇功招致門下于時十四歲也一見
而器之則陪馬乘入則侍幄中與宿將老吏明
章程主軍務慶長庚子秋四海鼎沸津東衡西

縱大相國自征戰于閑源分為二軍所謂前
軍福島正則也中軍井伊直政也後軍羽林也敵
大將者誰曰石田也字喜田也島津也兩陳挑戰
羽林者直政婿君也竊呼羽林密合兩軍迴福島
傍衝突奮田發羽林身自當敵數四嬰鋒觸及殺
戮尤多敵陣辟易無敢當者島津見字喜田血團
結一軍破銳摧堅血衣皆待徨公挺身跟馬馳入
陣中攢鎗擊刺身既被傷隊士馬後軍未援島津

夫王可也則我者則也心也雖完其論之偏之萬何蕭

卷旆幸而不死于時十九歲也兩軍敗績石田就擒天下歸源家大相國感羽林之雄略問士卒之忠否羽林以公為初弟一令謁見仰曰有是父有是子聞者稱歎曰依子之忠戰彰人之旧勳忠孝兩全且矣所墓之令茲久羽林就牙土封于尾陽擢三子增秩為諸士長三子者小笠原監物公及稻垣將監也田谷軍容無不與聞焉一日有亡命者恐彼執悍衆有難邑公不脫朝服攬刀徑

徑

進梟首而還羽林特感賜邑明年大相國往難波羽林亦在別館燕于福島池田淺野等列侯酒酣令公謁公馬列侯聞名執矣於是執手上堂備酒為壽誠陪臣之榮也羽林有名馬號一公是亦賜公其餘恩賚不可勝算矣慶長甲辰歲羽林推揚疾疴任再而至于乙巳歲身瀕九死因醫失措公與監物將監相共約告曰百歲後願為殉羽林堅制之不可曰我不食言矣倘有侍醫

夫王... 則我... 者也... 雖... 完... 其... 論... 之... 偏... 萬... 何... 蕭...

診視曰病可為也。樂餌數貼而沉痾有間。羽林嘉三子丹誠殊被眷遇。監物有故。遜于奧之松島。丁未歲春正月羽林述職于江城。寓于芝館。大樹枉駕迎見。友愛一喜。面會一懼。形瘦中使塞路。冠蓋相接。不幸而二月五日卒于芝館。公與將監不及襄事。遺書于監物曰：我君不可一日無侍臣乎。遂入增上寺。於柩前自殺。時二十七歲也。監物聞訃。喜出松島。到江城。入增上寺。向影前三拜。願被赦。

有故之罪狀可奉侍後世之靈地。且美二子之先我矣。下堂自殺。見者無不涕泣。嗚呼。世謂之追腹殉葬之議。上古有之。中也。禁之。久無行者。今也。武門握權。以義為先。以勇為上。有志而不有言。而不果者。豈生前成約。死後果行。是之為始矣。爾後列國習。且推以為例。是尚義勇之故也。余偶讀淵明集。詠三良詩曰：身息固難忘。君命安可違。又詠荆軻詩曰：其人雖已沒。千載有餘情。嗚呼。淵明千載入而慕千載。

夫王... 則我... 者也... 雖... 完... 其... 論... 之... 偏... 萬... 何... 蕭...

竹印

之前余生十載之後思淵明之意而悲三子之情鈞
是人也豈可不悲哉或曰羽林全天命三子為之傳則
於國家之勳可比周召太公之徒矣子不之情而悲三
子之情是偏於義勇而非中正之道也曰否天寶之
亂張巡許遠守睢陽城援不至者二百城陷時人悲焉
後君子論之曰天欲使忠勳鳴于万代又欲使知唐
室之有人明皇之愛士者也因是親之使為人君
者愛士如羽林則必為上死之使為人臣者事君如

三子則必為忠良矣然則羽林者武門之電鏡而
三子者臣子之軌範也嗚呼三子屈一時而伸後
世天今日而壽千歲是余所以感而悲之而又
所以嘉而筆之也銘曰

遇合時也 而有好述 舍策起谷 借箸以籌
果毅能決 笑孟明舟 先登無敵 軼考叔翰
生與其樂 死同伊憂 人秦風什 泳易水流
名傳末今 余任短脩 偉哉英烈 永溷天休

夫至可忍則我者心也雖完其論之德偏之德萬里之勢

寬永十六年二月五日

鹿陽路儒學子敬受兼醫官法眼杏菴正意誌

四字新記

之	天	公	天	雖	然	則	前
矣	覽	觀	瑞	吾	成	歷	年
木	旋	而	矣	儕	者	々	近
理	是	奇	其	小	遠	見	江
成	子	之	弟	人	近	四	國
文	安	遂	典	然	噴	楷	淺
齊	使	入	藥	亦	々	字	井
永	人		少	聖	記	曰	郡
明	二		丞	世	異	大	速
有	百		三	之	達	天	水
法	餘		角	一	村	下	村
天	里		某	民	子	一	人
德	負		言	也	安	字	伐
唐	未		之	當	得	大	陀
大	示		一	相	之	三	麻
曆	余		條	共	以	寸	樹
有	曰		闕	正	為	始	為
天	先		白	脩	家	節	薪
下	生		藤	以	藏	理	解
大	記		公	答	曰	自	之

陀麻樹似天竺桂

折燒柴取說
柿木中有文
字乃出夢後
筆誤

平西川之天尊像鳳翔之二馬形吾人以為吉祥善
事此亦瑞哉或曰是人作也非天造也昔人削樹膚
白之書字其白年久而肉生包字肉中先生獨未聞
兒嶋高德乎其說在折燒柴至永七年記白然非
徑數十百年不能生肉樹肥六七寸非肥六七寸不
能包字樹中且其斫之不得其所刺字絕且壞矣絕
不成語壞不成形其解之亦然非破文字中心則不
能歷々顯也足非天之贊人者哉鳳皇之至匪自天
降彼固有所住之國然其來鳴為聖世之瑞也賢才

出仕亦然其隱野非國家善事立朝官備備也者福
也福也者祥也鏡背歎天下一人皆好之故余亦以
此為子安庭階芝蘭玉樹子安國友人四世業醫所
活數十百人今得之豈因其積善之祥歟

筆字排折

詩家嫡子一時賢
孝感因君湧酒泉
飲罷觀飛

申潔人道當年李謫仙

流水行雲遊客身
邊不著一微塵
菊水唯携花一

把旅裝歸饋故鄉人

謝香川景樹詞伯見訪

翩王孫在中將
昔下吾孀元慶年
歸路亦應有歌

咏人間今無一首傳
香君知吾抱此恨
累歲積川思

纏絲今還自東將
歸京半道留馬示
錦篇云是途中

斯自咏讀之猶如中將
然百年宿恨洵若雪
白雪歌

Grid of faint bleed-through text from the reverse side of the page.

高寒梅前急头枯鱼
勸数杯更恨酒无墨田川

Blank grid area for calligraphy practice.

題醉鄉圖謝天民先生見訪

梅逸山人工繪事為我新作

舍葦、葦、接綠葦千頃良田

他租富水拋青名以春芳榭

皆可食野蔬山肴盈盤盂

自淮南厨此物能適酒人口

蕩身無累清風朗月錢不須

詩腔常相呼萬事具足復奚

人意匠慘吮筆皎、白駒一束

忽添天民老夫子

觀者稱妙聲不已嗚乎山人真高手非君孰得辨此
 事
 和天民老人養老道中見寄之作
 養老之山引何客酒泉之湧何時已泉無已時山禪
 人俗子難入紫煙裡前年余已宴山上今歲又遊天
 民子先生善詩復善飲所好此余皆相似瀑布如紳
 揮酒書山灵配顏含笑視
 酒湧菊花泉一道山中三日餐瑤草仙鄉能使頭還
 里不奈騷人詩益老

之地而遣之東韓者其羅城是也八月遣平群木
 菟宿林的戶田宿林於加羅仍投精兵謀之曰
 龍津音久之不還必由新羅人拒而滯之法等
 急往之擊剽羅披其道路於是木菟宿林
 等進精兵莅于剽羅之境剽羅王愕之服其
 罪乃率弓月之人夫與龍津音其來焉

筆字排折

飯池在大和國高市郡百濟池在大和國廣瀨郡
三代實錄後漢孝靈皇帝四代孫阿智使和迹王仁也續日本紀文忌寸最弟等言漢高帝之後曰高、之後王狗轉至百濟久素王時聖朝遣使徵召及人久素王即阿狗孫王仁貢

此之御世定賜海部山部山守部伊勢部也亦作飯池亦新羅人參渡來是以建

內宿祢命引率為倭之堤池而作百濟池亦百濟國主照古王以牡馬壹疋牝馬壹疋付阿

知吉師以貢上此何知吉師者亦貢上橫刀及大鏡

又科賜百濟國若有賢人者貢上故受命以貢

上人名和迹師即論語十卷千字文一卷并十

一卷付是人即貢進此和迹師者

右古事記書後

十五年秋八月壬戌朔丁卯百濟王遣阿直岐貢良

十五

十五年秋八月壬戌朔丁卯百濟王遣阿直岐貢良

Vertical columns of faint text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

筆字排行

馬二匹即養於輟坂上厩因以阿直岐令掌飼故
号其養馬之處曰厩坂也阿直岐亦能讀經典
即太子菟道稚郎子師焉於是天皇問阿直
岐曰如勝汝博士亦有耶對曰有王仁者是秀
也時遣上毛野若祖荒田別座別於百濟仍徵王
仁也其阿直岐者河直岐史之姪祖也

十六年春二月王仁來之則太子菟道稚郎子
師之習諸典籍藉於王仁莫不通達故所謂王仁者
是書道等之始祖也是歲百濟阿花王薨天皇
召直支王謂之曰汝返於國以嗣位仍且賜東韓

豐山苑賦并序

豐田仲任

仲任年十四五始讀五經焚膏繼晷孜孜自勉而不
能通其義究其理則不以經術自處好為詞賦自娯
尋章摘句十九年而未得也昔者漢有枚叔作兔園
賦辭甚閑靡竊有慕焉會得以末技侍

金臺公子從觀豐山之勝此苑也希世而特秀者也
若其宮室之美置而不論林澗之奧丘壑之邃可以
搏神澄懷而芳草甘木鱗介羽毛充仞其中是操觚
者所不能自己也自恨才不及古人不能狀豐麗瓌
偉之態然至其感物興懷今猶古也西施無鹽亦何

擇焉於是援毫賦之云爾

維孟侯之垂統實奕葉而蕃昌受茅土于甸服奉周
索以治疆五穀鄰熟國有禎祥敷教在寬不失紀綱
齊聖廣淵率由舊章盛德漏泉庶事康哉於是有臺
池鳥獸之觀金石薰服之樂一游一豫與民共之若
乃豐山之苑在千世田之西郊其為地也豁達博敞
高爽幽深豐壤奧區周回數十里而居焉其宮室則
凌絳霞而直上履厚坤而成基坑文木以為梁斷瓌
材而為椽璇題玉碣文璫雲楣山咨木藻祝陽馬伏
龜鄙雪宮陋蘭臺狹碣石隘庖祁盧亭月觀吹臺琴

室金碧班璘華飾非一龍蛇盤桓鳳翥極非奚非
輪誰能營之爾乃餘慶之堂巋然高居碧瓦朱甍上
逼紫虛及宇崔嵬參檮相接棧鏗嶮嶮結構複疊芙
蓉八朶宛在眉睫赫奕東眷徐露寶曆爾乃動植之
物既殷且阜異類殊品靡所不有窮谷深林吐雲吸
風四時之觀億變不窮其山也圓嵩左峙既隆且崇
松柏駢羅鬱乎蒙籠孽狐穴其足玄鶴棲其中白雲
叱其西紅暎映其東西南之山精舍在焉磴道縈紆
玉石揚教華鯨朝吼天女夜下共命之鳥鳴聲和雅
靈阜岑蔚斯開法門阿育之功寶刹存焉滌六入之

贈殘王餘輿銅鑪巨口細鱗縮頂頰尾圍々唯々
戲蒲依葦吹浪傳沫鱗々刺々其穀也則亦稷白稷
黑黍黃粱不莠不稂擢穗垂芒已實且熟五里吹香
離々油々連畝接場於是君乃宴隨柳之亭即移大
原之館彈號鐘之琴奏雲璈之管翕如純如絡繹不
斷伐鼓撞鐘式燕式衍爾乃戒彼廢御試馬永埒白
兔紫燕霜蹄森列翠麟象龍騰驤要映秋駕既習步
驟中節爾乃秋冬之文白露戒寒牽黃臂蒼遵江之
干搏鴻鵠擊鶴鶻鳧雁害鷗鷺殘毛羣盡羽族單於
是回鑣反旆投臨遙之亭出竹倚門使豫且詹何

之屬下網垂綸捕盈車之鰥曳四足之鱗於是泛艫
艫放舲舲青雀集赤馬雙奏桑林之舞唱小海之曲
白魚為之潛躍玄鶴為之行于歌曰錦席兮玳筵急
管兮繁絃歲云晏兮留連景已逝兮未旋感節序兮
屢遷願彭祖兮同年於是君乃還歸望嶽之館端拱
恭默悟志不可滿樂不可極罷畢弋省遊娯徵耆老
延文儒誦二典講三謨垂徽猷闡宏圖率玄聖之丕
訓慎素王之明戒察邇言于芻蕘觀盈虛於八卦於
是上下相親君臣相得國家殷富民無菜色尹士御
事各脩厥職大夫君子將順匡翼於是輿人頌之曰

憲々君子既寬且弘右文左武玄德日升一張一弛
有準有繩介爾景福教化用興黎庶向風畏刑懷惠
詞臣作頌以告後世

清河城墟碑銘并序

清河城墟碑銘并序

三年織田信友弒其主義統而篡國義統者義廣之孫也
明年織田右府討信友終克之而立義統之孤奉之焉義
銀是也永祿四年義銀遜于和屋織田氏遂代之天
正十年右府為賊所弒賊平後諸將分其遺地則內
府信雄承之十八年豐臣大閤遷內府於秋田而令其養
子秀次領之秀次敗後以与福嶋正則関原之役正則多
東照宮以封於安藝備後二州而居第四子薩广君子
此君薨無嗣我

敬公纂緒慶長十五年

東照宮大脩營和屋城而舉城市遷之自板築迄于茲二

百五十年殿閣府舍第宅塵閉櫛比鱗次之地無一
不開墾者唯存于城臺

之小墟其他云云之旧

称所在猶存焉是以舊規延哀且畧識其大概矣
先時縣令朝田氏恐日月墮墳而螽食全盡也乃
令邑民栽四域以小松于今四十年許其樹已為三四
圍而称古樹者唯松三本榎一株驛老武田某業傷

勝蹟之湮滅懷古之情切矣焉於是語予以其事囑予
以其銘曰庶幾刊盤石以傳之於萬億斯年善其好古之
志乃是作為之且粗記當城之來歷以為之云尔

銘曰

斯波肇基 一歷世虎踞 墉洳崇濬 萌黎富庶
土產嘉穀 人饒翹楚 登台騁名 為魁馳譽
民重五教 國謹百度 金甌莫虧 天府惟固
春秋不居 時運何住 一朝東遷 烏烏相念

閨寂其墟 爰昂地祗 葛甯荒徑 蛛網朽糢
老鴟濃睡 飢飽于飛 通湟是堙 高壘惟夷
箕悲麥秀 周詠黍離 喬木幾盡 殘臺漸墮
遺羊可愛 勿斧勿鑿 嗟吁千古 勿易我辭

本藩 岡田高茂撰 德囑

年号時月日 清洲驛老武田農業建之

賴朝論

治亂迭反譬如糾繆興國不必英主喪邦豈必闇
 主在操心危守與時世使然耳三代之末非無賢
 主六朝之主不悉英主若夫保平之際天下之權
 專歸平氏窮極滿盛加以國母之威而大臣掘起
 其中遂成天下者何也當其初操心危慮患深是
 以出因宗清之家以命可惜為言在鏡八幡以盛

守之言為不聞者播遷伊豆動罹伊藤凶害殆殞
其身幸附托北條微露其志及平政侈糜日甚源
氏陵遲日衰政出自家帝拱手而已惟有重盛忠
孝善使相國不得騁其惡而不幸蚤薨於是相國
之暴不可抑止逼徙上皇於鳥羽建新都於福
原既而復舊都公卿懷弗靖之戚士庶作胥讒之
慝及賴政奉以仁親王據獻山兩都之謀未合
義名歛為烏有至是相國激怒謀夷滅天下源氏

當時諸源非無奮義逞勇之士拔城陷陣之將而
平氏之族充牣天下恐事不成而身為天下戮竄
逃屏息俛首候時而大臣偏師據石橋山不以一
敗為憂制至其後既而景季未降景親為戮坐使
義仲克獲平氏於京師然後隨而制其死命身未
出關東四海大定及萬乘西殲廷尉東旋雖有靖
難之功然矜誇之色發於動作夫廷尉為人勇悍
酷烈可共共亂不可共共治可以處人上不可以

處人下使之據土擁衆恐遺養虎之害不利國家
矣至於強請討大臣院宣虓暴之甚於是可見是
以大臣離逃骨肉捐棄大功固有以也至賴家不
肖不守成柄歸外家嚮使時政不在重位微抑
其權恐無三代忠諸之歎嗚呼英雄之主而有所
不至惜哉

鳳文撰

義經論

世有論源延尉者云惜哉以將遭世罔極迺損其
身方其乘機應變殲平賊於西海功誰出其右者
而賴朝拒而不納矣賴朝英雄豪傑而忍其第一
至茲極且其三世而忽諸是廷尉所以罹其毒也
余以為不然方賴朝舉義軍於關東廷尉有東與
未會黃瀬川於是賴朝相見大喜有故頭殿再生
之語其孔懷睦古之情出于性可見矣至於平賊

不國藏粹

遷都義仲擁帝使範賴乃廷尉兩道進兵以靖京
師之亂屬以六萬之衆豈不信而然也及義仲敗
死尋討平賊賴邕軍於備中因循過歲廷尉直
進陷一谷破八島遂麤種浦破竹之勢不得不然
及其凱旋之日上皇多其功以補檢非遣使廷
尉受而不辭是其所以見忌取醜而非自全之術
賴朝身不出關東日望平賊殄滅二弟東歸而已
而賴賴在軍遲回廷尉在軍事之專斷其東歸也

以將軍之功為獨在于己已有身心以入錄倉豈
能立人下風以自靖者乎賴朝既不快其專斷又
不審其受爵不辭諂隨間之身擯不亦宜乎故使
時受俘獲於腰越又使監其俘獲歸京是何故哉
不道使其抑驕傲之志耳而廷尉不達事且直以
為忌已且以為景時諂己不亦大謬乎退守錄倉
之命裁抑驕傲不以前功為恃敢亦自全之道矣
及其景時未調昌俊未襲源氏之情變為仇敵固

可惜矣不然當彼討義仲伐平賊之時舍廷尉豈
 有別人乎是賴朝所以先見不爽屬以大事之由
 也平賊既已殄滅豈不欲亟見親勞慰之乎所以
 不可見而不見固有以而然如其不然拊并之害
 恐不可圖豈可使廷尉得近至腰越乎是其愛以
 不為害審矣而廷尉元龍之悔不悛矜大之色自
 若却發景時怨言強請討賴朝院宜固所以自斃
 是不賴朝所以先見不爽拒腰越之故也院宜之

命不行身竄南海北陸遂斃衣川固有以自取焉
 易曰濡有衣袽廷尉之謂也

鳳文撰

不圖歲序

Blank page with a red grid pattern, likely for calligraphy practice.

八國藏粹

粧臺窺東

普天樂晚粧烏雲暎輕勻了粉臉亂挽起雲鬟把簡
帖兒拈將粧盒兒按折開封皮攷一着顛來倒去不
害心煩則見他俺厭的托皺了黛眉忽的波低垂了
粉頸氲的呵改變了朱顏快活三分明是你過犯沒
來由把我摧殘使別人顛倒惡心煩你不慣誰曾慣
長亭送別

端正好碧雲天黃花地西風緊北雁南飛曉來誰染
霜林醉總是離人淚滾繡毬恨相見得遲怨歸去得

疾柳絲長玉駝難繫恨不得倩疎林挂住斜暉馬兒
迤：行車兒快：隨却告了相思迴避破題兒又早
別離聽得道一聲去也鬆了金釧遙望見十里長亭
減了玉肌此恨誰知

佛殿竒逢

節：高隨喜了上方佛殿早來到下方僧院行過厨
房近西澹堂北鍾樓前面遊了洞房登了寶壇把迴
廊繞遍數了羅漢參了菩薩拜了聖賢呀正撞着五
百年風流業冤上馬嬌這的是堯率宮休猜做離恨

天誰想這寺裡遇神仙我見他宜嗔宜喜春風面偏
宜貼翠花鈿

僧寮假館

石榴花 大師一：問行藏小生仔細訴衷腸自來西
洛是吾鄉宦遊在四方先人授禮部尚書多名望五
旬上因病身已平生正直無偏向止宙下四海一空
囊公也不要香積厨枯木堂遠着南軒離着東墻靠
着西廂近主廊過耳房都皆停當你是必休題着長
老方丈

乘夜踰墻

沉醉東風 戒則道槐影風搖暮鴉元來是玉人帽側
烏紗一箇潛身在曲檻邊一箇背立在湖山下那里
叙寒溫並不曾打話便做道搜得慌呵你也索覷咱
多管是餓得你箇窮醉酸眼花喬脾兒你看那澹雲
籠月華侶紅紙護銀蟾柳絲斜日垂簾下綠莎茵鋪
着繡榻

請生解圍

賺煞 諸僧衆各逃生衆家眷誰做問這生不相識橫

枝兒着緊非是先生多議論也提防着玉石俱焚雖
然是不關親可憐見命在逡巡濟不濟權將秀才來
儘果若有出師表文嚇蠻書信則願你筆尖兒橫掃
了五千人

倩紅問病

禿廝兒 身卧着一條布衾頭枕着三尺瑤琴他來時
怎生和你一處寢凍得來戰戰兢兢說甚知音 聖藥
玉果若你有心他有心昨日秋千院宇夜深沉花有
陰月有陰春宵一刻抵千金何須詩對會家吟 絲絲

娘然尾回今宵傳言送語者明日携雲握雨

五十八
...

送王屋山人魏萬還王屋

王屋山人魏萬云自嵩宋沿吳相訪數千里
不遇乘興游台越徑永嘉觀謝公石門後於
廣陵相見美而愛文好古浪跡方外因述其
行而贈是詩

僊人東方生浩蕩弄雲海沛然乘天遊獨往失所在
魏侯繼大名本家聊攝城卷舒入元化點與古賢并
十三弄文史揮筆如振綺辯折田巴生心齋魯連子
西涉清洛源頗驚人世喧采秀臥王屋因窺洞天門
謁來游富峯羽客何雙朝攜月光子暮宿玉女壘
兎谷上窈窕龍潭下奔潑東浮汴河水訪我三千里
逸興滿吳雲飄飄浙江汜揮手杭越間章亭望潮還
濤卷海門石雲橫天際山白雪走素車雷奔駭心顏

遙聞會稽美且度耶溪水萬壑與千巖
 崢嶸鏡湖裏秀色不可名清輝滿江城
 人遊月邊去舟在空中行此中久延佇
 入剡尋王許笑讀曹娥碑沈吟黃絹語
 天台連四明日入向國清五峯轉月色
 百里行松聲靈溪沿沿越華頂殊超忽
 石梁橫青天側半月眷然思永嘉不憚
 海路賒掛席歷海嶠迴瞻赤城霞赤城
 漸微沒孤嶼前峴兀水續萬古流亭空
 千霜月縉雲川苦難石門最可觀瀑布
 掛北斗莫窮此水端噴壁洒素雪空濛
 生晝寒却思惡溪去寧懼惡溪惡咆
 吼七十灘水石相噴薄路創李北海巖
 開謝康樂松風和猿聲搜索連洞壑徑
 出梅花橋雙溪納歸潮落帆金華岸赤
 松若可招沈約八詠樓城西孤岩窈窕
 荒外曠望群川會雲卷天池開波連浙
 西大亂新安口北指嚴光瀨釣臺碧雲
 中邈與蒼巖對稍

來吳都徘徊上孤蘇煙綿橫九疑潏蕩
 見五湖目極心更遠悲歌但長吁迴橈
 楚江濱揮策揚子津身著日奔裘日奔裘則朝卿之所贈昂藏出凡塵五月造我詔知
 非佞人相逢樂無限水石日在眼凌干
 五諸侯不致百金產吾友揚子雲絃歌
 播清芬雖為江寧宰好與山公辟乘興
 但一行且知我愛君來幾何時仙臺應
 有期東牕綠玉樹定長三五枝至今天
 壇人當笑爾歸遲我苦惜遠別茫然使
 心悲黃河若不斷白首長相思

Faint, illegible text, likely bleed-through from the reverse side of the page.

筆字排板

